みめぐみの

第18部

みめぐみの

第18部

大谷光道著

目次

きっと・・・するはずだ ……2
ある質問から ……2
正解 ……4
八百年前にも同じことが …7
粉骨砕身 ……12
当然のなりゆき ……17
信心はどうしたら
もらえるのか ……21
道 ……23
読者の頁 ……27
あとがき ……31

きっと…するはずだ

ある質問から

「三年前に父を亡くしました。亡くなるとき父は何故かうれしそうにしきりにお念仏を称えて、安心しきった明るい表情のままで逝きました。私にはこれがどういうことなのかわかりません。もうひとつ、お念仏というのはいったいだれのために称えるんでしょうか。この二点を教えてください。」

これは先日他所でいただいた質問です。最近これと同じような疑問をお持ちの方が多いので、今日はこのことを考えていきましょう。

「お念仏を称えながら明るく穏やかに亡くなられたことについて、わからないと仰ること自体がわかりません。お父様がせっかく身をもって説法してくださっているのに、それを私がとやかくご説明すると、そのご説法がぶち壊しになってしまいます。それから、お念仏はもちろん自分のために称えるんですよ。」

それにしても私はなんと乱暴な、不親切なお答えをしてしまったものでしょう。「わからないから教えて。」なのに「なんでわからんのか、わからん。」だけで片付けてしまったことについて、「どうしてもっと適切なお答えができなかったのか。」と、あとになってだんだん悔やまれるようになりました。

さらに、「お念仏はだれのために称えるのか。」との質問に「もちろん自分のためにですよ。」と。ここで私は、「他人のために称えるんじゃありませんよ。」と強調したいばっかりに、大事な「御恩報謝」というひとことを落としてしまっていたのです。

この方の本音が、どうやら、「お念仏は、今亡くなろうとする父のために私が称えてあげるものなんでしょ？」というところにあるとしか思えず、私が「それは違う。」と慌てた結果こうなった、というのが正直なところです。

正　解

今にして思えば、次のようなお答えをすれば、「まずまず正解だったかな。」と。

こんな場面を想像してみてください。「あなたは、『あの人は今にも溺れそうになっているとしか思えないのに、何故かうれしそうにしている。よくわからないが、とにかく私が水に飛び込んで助けなければ……。』と仰っているようなものです。しかし、もう一度よく見てください。その人は溺れかけているどころか、立派な水泳選手ではありませんか。泳ぎ方をよく見て、是非お手本にされるようにお奨めします。それとその前にもう一つ。『助けた

い。』と言われるけれども、失礼ながらお聞きしますが、あなたご自身泳ぎには自信あるのですか。」と。

ご承知のように浄土真宗で奨めるお念仏は、他人の成仏のためにお念仏を称え、その称えた功徳――念仏というよい行いをした見返り、効果――によってその人を成仏させようというお念仏ではありませんね（『みめぐみの』第十一部参照）。他人を成仏させるためにお念仏を称え、それが効き目を現わすためには、何よりも自分自身が他人を成仏させるだけの力を持っていることが必要です。このような他人を成仏させる力があるのは阿弥陀様だけであって、私にこのような力がないことに目覚めることから始まるのが他力の教えです。別の言い方をすると、「自分自身が成仏できるかどうかもわからないのに、他人を成仏させようとしているのではないか。」ということにまず気づきましょう、ということです。

溺れかけている人を見たとき、慌てて水に飛び込む前に、自分自身が泳げ

るかどうかを考えてみることであり、もしカナヅチであれば「早めに水泳の稽古をしておこう。」ということです。

他力の念仏とは、私たちにとって何とも得難い大切なご信心を阿弥陀様からいただいて、そのうれしさありがたさのあまり自然に「なむあみだぶつ」が「この私の口からお出ましくださる」というのが一番自然な姿です。これが御恩報謝のお念仏です。

「だれのために」かと言えば、確かに自分のために称えるお念仏なんだけれども、「信心をいただいた喜びの、御恩報謝のお念仏」というのが他力のお念仏で、自分の成仏を当て込んだ念仏――見返りを期待した念仏――ならば、やはり自力念仏になってしまいますからね。他人に対するのと同じように、称える功徳によって自分が成仏しようとするものではない、というのが他力の念仏です。

八百年前にも同じことが

このご質問の方のお父様は、無上の念仏信者だったのだと手が合わされます。もしこのような臨終が迎えられるなら、こんなに素晴らしいことがあるでしょうか。

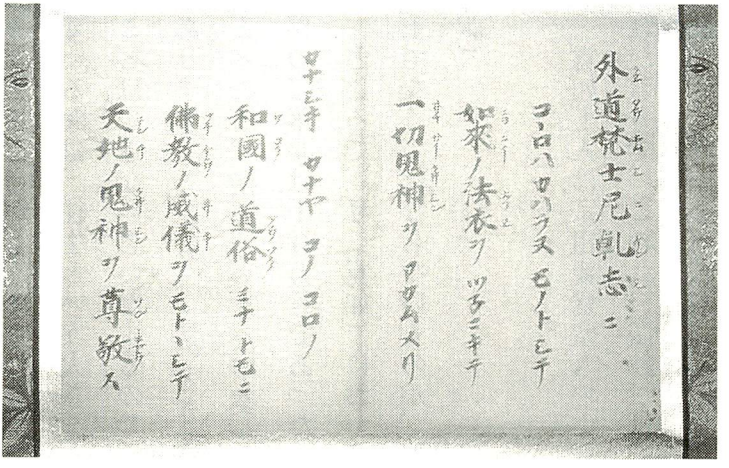
本願寺第三世・覚如上人（一二七〇―一三五一）の著わされた『口伝鈔』の一節（第十六段）に、これと全く同じ内容で、親鸞聖人とそのお弟子の故事が述べられています。まずは原文――または意訳――をご覧ください。

一　信のうへの称名の事。聖人［親鸞］の御弟子に、高田の覚信房［太郎入道と号す］といふひとありき。重病をうけて御坊中にして獲麟にのぞむとき、聖人［親鸞］入御ありて危急の体を御覧ぜらるるところに、呼吸の息あらくしてすでに絶えなんとするに、称名おこたらず、ひまなし。

そのとき聖人たづねおほせられてのたまはく、「そのくるしげさに念仏強盛の条、まづ神妙たり。ただし所存不審、いかん」と。覚信房答へまうされていはく、「よろこびすでに近づけり、存ぜんこと一瞬に迫る。刹那のあひだたりといふとも、息のかよはんほどは往生の大益を得たる仏恩を報謝せずんばあるべからずと存ずるについて、かくのごとく報謝のために称名つかまつるものなり」と云々。このとき聖人［親鸞］、「年来常随給仕のあひだの提撕、そのしるしありけり」と、御感のあまり随喜の御落涙千行万行なり。

しかればわたくしにこれをもつてこれを案ずるに、真宗の肝要、安心の要須、これにあるものか。（以下略）

一、信の上の称名の事。親鸞聖人の御弟子に、高田の覚信房［別名・太郎入道］という人がいた。重病に罹って御坊の中で臨終に臨むときに、聖人が



覚如上人御筆ご和讃（筆者蔵）

（その部屋に）お入りになって危急のありさまをご覧になると、呼吸の息あらくすでに絶えてしまおうとするときに、称名念仏を怠ることなく、絶えることがない。

そのとき聖人がお尋ねになって仰るには、「そのように苦しそうな様子なのに念仏が強く盛んであること、何はともあれ感心なことである。しかし（あなたが）心に思っていることがよくわからない、どうしたのか。」と。

覚信房がお答え申し上げて言うには、「よろこびがすでに近づいています、望

みとすることがもうすぐに迫っています。わずかの間たりとも息の出入りしている間は、往生という大きなご利益をいただいた仏恩を報謝しないでいることはできない思いがするので、このように報謝のために称名いたすものであります。」と云々。このとき聖人は、「年来そばにいて世話をしてくれているところ、指導してきた甲斐があるのだなあ。」と、感動されたあまり、随喜のご落涙は千行万行であった。

ところで、私（覚如）においてこのことを考えると、真宗の肝要、安心の上でなくてはならないものが、ここにあるのだなあ。（以下略）（註：筆者意訳）

覚如上人は宗祖親鸞聖人の亡きあと興った浄土真宗の種々の解釈を是正されたお方で、この『口伝鈔』は、「本願寺の鸞聖人（親鸞）、如信上人に対しましまして、をりをりの御物語の条々」で始まり、如信上人（本願寺第二

世、『みめぐみの』第六部参照）が親鸞聖人から聞かれたご事績の中で浄土真宗の肝要を二十一箇条に選びまとめられたもので、法然上人――親鸞聖人――如信上人――覚如上人、と浄土真宗の教えが伝えられたことを示す大切なお聖教（聖典）です。

ここで、この覚信房は、何も「死ねること」を喜んでいるのではありません。親鸞聖人も「そうか、おまえ死ねるのか、よかったな。」と仰っているのではありません（笑）。「死ぬ」ことは「縁」によるのですから、どんな縁で、またいつ何時ということはわかりません。その点については、今現在元気な私たちも同じです。

ちなみに、「病気で死んだ」「事故で死んだ」などと、私たちは病気や事故を死の原因としていますが、仏教では死の「因」は「生（生まれたこと）」であると考え、病気や事故は死の「縁」であると考えます。死の根本原因を生と考えるというのは、物事の本質を見逃そうとしない仏教の特質でしょう

（『みめぐみの』第十七部参照）。

覚如上人はこの第十六段の続きで、死の縁や平生業成（『みめぐみの』第八部参照）について述べられています。長くなるので、またの機会にお話しします。そして最後に、次のように結ばれています。

これによりて、かの御弟子最後のきざみ、御相承の眼目相違なきについて、御感涙を流さるゝものなり。知るべし。

これによって、かの御弟子（覚信房）最後のその時、ご相承（教えや悟りの内容・本質を師匠から弟子へと伝え受け継ぐこと『岩波仏教辞典』）の要点として相違ないことについて、ご感涙をお流しになったものである。知りなさい。（註：筆者意訳）

粉骨砕身

話をもとにもどして、ここで覚信房が喜んでいるのは「往生の大益を得た

る」喜びであって、「かねてよりご信心をいただいているので、この世の命が終ったらお浄土へ行ける」という、つまり行く先が決まっている、それも並のことでは行けない素晴らしいところ――お浄土はお浄土でも「報土」というお浄土のど真ん中――へ行ける、そのことを喜んでいるのです。

その喜びがお念仏になって現れてくるわけで、「仏恩を報謝せずんばあるべからず。かくのごとく報謝のために称名つかまつるものなり。」となるわけです。

そこで念のためですが、何故「お念仏」なのか、というと、ご恩を被(こうむ)った人のことは「忘れない」のが当然で、その人とは他ならぬ阿弥陀様だからお念仏、「南無阿弥陀仏（阿弥陀様に帰依します）」なのです。

これはたとえば、私たちがどなたかに品物をいただいたり、また何かのお世話になったりしたようなときならば、たいがい「ありがとうございます。」とお礼を言ったり、また然るべきお返しをすることで、まあまあ気持ちは済

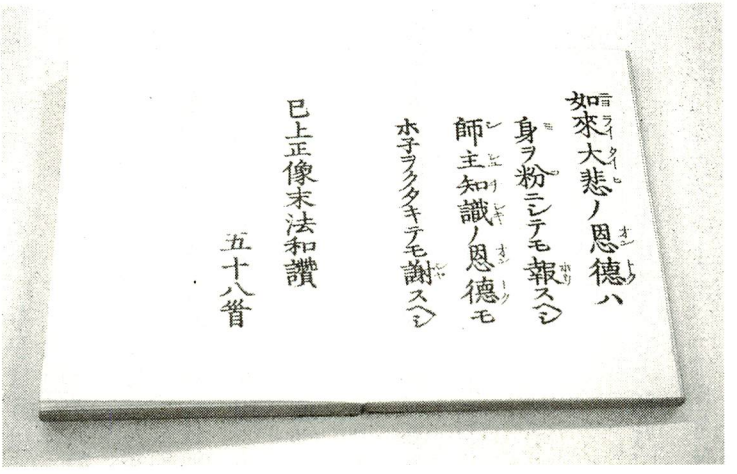
むわけですが、今の場合、ご信心という貴重な宝物を頂戴したわけで、「とてもそのようなことでは済むものではない」という思いになるということです。

いつもお勤めする『恩徳讃』にあるように「身を粉にしても」「骨を砕いても」、まだまだそれでもご報謝をしたという、そういう気には一向になれない、それほどに貴いものを頂戴するわけです。

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ほねをくだきても謝すべし

（『恩徳讃』）

大悲…衆生（あらゆる生あるもの）を苦しみから救おうとする広大な慈悲の心
師主知識…お釈迦様を始め、「私」に教えを伝えてくださった方々



このことから、『夕鶴』の物語のことが浮かんできます。傷ついて死にかかっていた鶴を「与ひょう」という若者が助けてやる、あのお話です。

助けられた鶴は、「つう」という美しい人間の娘になって現れ、やがて与ひょうの嫁になります。ご存じでしょう、このお話。つうは自分の羽を一本一本むしり取って、それを織り込んだ世にも珍しい素晴らしい布を織る。与ひょうはその織物を都に持って行くと高価に売れ、たちまちに大金持ちになる。欲に狂った与ひょうは、つうに次から次へとこの織物

を織らせる。ある日、与ひょうはつうとの約束で「見てはいけない」ことになっていた〝作業場〟をこっそり見てしまった。それを知ったつうは与ひょうに別れを告げ、羽の無くなった哀れな姿でどこかに飛び去ってしまう。

『夕鶴』（木下順二作）は、佐渡島（さどがしま）の昔話『鶴の恩返し』に基づく民話劇ですが、同じ『夕鶴』という題でオペラ化されており、以前見に行ったのを思い出します。本で読むのと違ってやはり舞台から迫ってくるものには、言葉では言いつくせないものがあります。

恩を返されたはずの若者が、その「心」を受け止められず「物」に走ってしまった、という悲しい物語ですが、そのことによって、「ご恩返しとはこういうことである」ということがいっそう浮き彫りにされ、私たちに感動を与えずにはおきません。

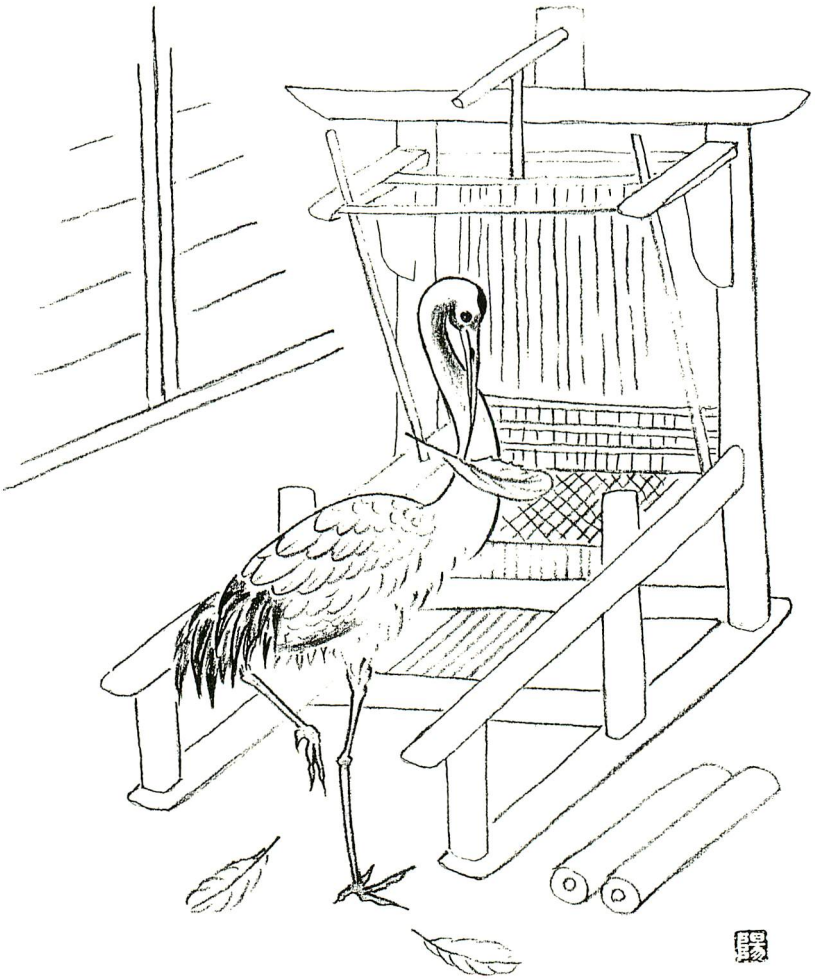
実は、オペラを見るまでの私は、物語の言わんとするところが私の中でうまく形にならないまま、「つうと与ひょうの単なる行き違い、それがどうし

たというんや。でもやっぱり、もっと何かあるやろう。」というぼんやりした思いだけで、そのまま放置していました。しかしオペラを見て、真の恩返しの難しさを提示している素晴らしいお話だと、感じました。

「身を粉にしても」「骨を砕いても」とはこれと同じことで、それほど「如来大悲の恩徳」は尊いのであると、親鸞聖人はこのご和讃にお説きになっています。「粉骨砕身（ふんこつさいしん）」といえば、日常用語にもありますね。骨と身とが反対ですが、同じ意味です。

当然のなりゆき

親鸞聖人のご和讃の中でも、この『恩徳讃』ほどポピュラーで、いつも称えられるご和讃はないでしょう。毎年、寺院はもちろん、各家庭や地域の各団体で勤められる報恩講は『恩徳讃』なしでは勤まりません。また、『恩徳讃』にメロディをつけた歌が、明治以降三曲も——数だけが問題ではないの



ですが――作られています。

『恩徳讃』は語句の説明は特にいらないと思います。ただ、「べし」だけは――国語の先生みたいになって恐縮ですが――意味を取り違えないように注意してください。

「べし」というと、私たちは「……しなければならない」という、義務や命令、強制の意味で使うのに慣れてしまっていて、ここではこの意味に取ると御恩報謝の押しつけになって、意味が逆になってしまいます。

実は私も、以前はそのような意味に取っていて、このご和讃に抵抗がありました。そのついでにふつうによく使う「感謝」という言葉にも「押しつけ感」を持っていて、「感謝」という言葉まで嫌いでした。もう少し考えればよかったのですが、私の早合点としか言いようがありません。

古文は意味が豊富なので、現代文に訳してしまうと趣(おもむき)をなくしてしまい、まことに味気なく、どれだけ説明をつけてもそのニュアンスが伝わらないこ

とが常で、残念ですね。

「べし」も例外ではなく、古文でははるかに意味が豊富で、ここでは当然のなりゆきを意味します。つまり、「…にちがいない」「きっと…するはずだ」と読むのが自然です。

ご恩を感じるからこそ自動的に報謝をしようとするのであって、他人からいくら「報謝せよ。」と言われても、ご恩を感じていなければ――これも自動的に――報謝しないのは当然で、そう考えれば、やはり御恩報謝は「当然のなりゆき」であることがわかります。

「仏法」というと言葉は硬く感じますが、仏法に説かれることはすべてこのように「無理のない」ことばかりで、もし「無理がある」と感じるときは、どこかがおかしいのです。さっき、私がこのご和讃に抵抗を持っていたと言いましたが、この場合は私に無理があったということですね。

仏法というのは、お釈迦様が「発明」されたものではなく、「発見」され

たもので、「法則」だといえます。ニュートンが、リンゴが落ちるのを見て万有引力の法則を発見したのと同じことです。

信心はどうしたらもらえるのか

そこで、「信心をいただいた後のことは御恩報謝あるのみという道理はわかったが、いったいその信心をもらうにはどうしたらいいのか。」というご質問が出てくるでしょう。

自力の修行を行う聖道門と違って、「こうすれば、こうなる」というような、だれにでも当てはまる一定の修行方法がないので、ここが浄土真宗の最も厄介なところです。信心という宝物を入手して、心豊かな毎日を送りたいものですが、この辺りが浄土真宗のもどかしいところで、お浄土が「往きやすくして、人なし。」と言われる理由もここにあります。でも考えてみると、聖道門の各宗の場合も修行の成果は内心のものなので、やはり同じかも知れ

ません。

またその信心というものの中身、つまりどんな心境なのかということもよくわからず、ご信心をいただくために精進する勢いもいまひとつ出てきません。

たとえば、「物心がつく」という言葉がありますが、それと比べてみてはどうでしょう。小さい頃は、この世に生まれてきて物心がつくまでの記憶は、それ以後に比べて明かに一線が引かれているのがわかります。ただ無邪気としか言いようがなかった時代から、物心がついて自分という存在について意識するようになり、徐々に世界観を持つようになりますが、信心という「世界観」もこれと重ねて考えることができるのではないでしょうか。

信心をいただいて始めて、それまで何も考えなかったものが、「今まで阿弥陀様に育てていただいていたのだなあ。」と気づいて世界が一変するのです。

また、ふだんは水や空気のありがたさに気づきません。生まれたときからずーっと当たり前のようにあって、しかも只だからでしょう。如来大悲のご恩もこれにたとえられると思います。物心がつくのと同じように、このご恩に気づくことによって始めて、本物のお念仏が「私」の口から「お出ましになる」のです。

道

しかしまあ結局、「ごちゃごちゃ言わずに称えてみー。」ということで、後のことは考えず、まずお念仏

を称えてみることです。声に出しても出さなくてもいいので、いつも称えるように心がけ、称える癖をつけることでしょう。

そうしているうちに、だんだんと「称えないと気持ちが悪い」ようになってきて、何か忘れ物をしているようになるはずです。

「道」という考え方があります。私は剣道のことは知りませんが、「とにかく竹刀を握って振ってみー。」から始まるそうです。道と名のつくもの、柔道、茶道、華道…全てがそうで、「まず、やってみよ。」でしょう。仏道、もちろんそうです。東洋人はこういう道の求め方に抵抗なく素直に入れるのだそうで、「どうなるから、どうする」のではなく――つまり理屈を納得してから始めるのではなく――まずやってみることでしょう。

浄土真宗は「聞法」をやかましく言いますが、ただ聞法するのではなくて、称える生活の中で聞法するべきです。「聞法」とは、一応はお説教を聞くことですが、本――仏教書に限らずどんな本でも――を読むことも、人と会話

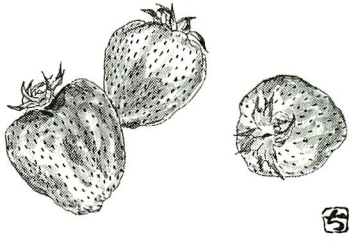
を交わすことも、道端に咲いている花を見ることも、私たちに感動を与えることの元になること全てが、聞法と言えます。

この聞法の全てが、言い換えれば、私たちの日常のあらゆる経験が、徐々に信心を深め、お念仏の味をより豊かなものにします。「これが信心だ。」というところまで行かなくても、日々「お念仏に育てられている」のです。

何か考え事をするときにでも心の中でお念仏を称えるようにすることで、自分だけの狭い――つまり我欲――から離れることができ、物事の見通しが良くなるはずです。このことで、気づかなかった落とし穴を見つけることもできます。他人が仕掛けたわけでもない穴に落ちることを「自ら墓穴を掘る」などと言いますが、「我欲」のために身を滅ぼすことは世の常ですね。お念仏によって、このようなところから救われます。

癖になってそれをしないと気持ちが悪いということは、毎朝顔を洗うこと

や、歯を磨くことなどいっぱいありますが、まず、お念仏もその一つに加えるよう心に決めては如何でしょうか――やがて、このお念仏が他の癖を追い抜いて、「癖筆頭」になることでしょう。



読者の頁

感想意見

神奈川県相模原市　山本　誠子さん

「共に苦しんでくださる、共に力を出してくださる」のです。このことが本当の意味で私達に一番力になることです。心の支えだと信じて合掌することが共に生きるのが喜びだから共に老いるのも喜びだと祈っています。ありがとうございました。

東京都町田市　津留崎　恵美子さん

私共も今報恩講で他力の力のことを、教えていただいたばかりだったので、第16部を読んで、なおよく理解されました。人間かならず死がおとずれるなら、素

直な心で「本当にありがとう」と自然態で死ねたらどんなにいいだろうと二年前から報恩講に参加する様になりました。たしかに、最近では自分でも不思議の様に心がおだやかなのに、気がつきました。何でこんなに幸せな心でいられるのだろうと。この気持ちが真の幸せなのでしょうね。それこそ他力の力がみちびいて下さっているのでしょうか。

東京都町田市　山口　はるみさん

日頃お寺へ行くことがなく、この『みめぐみの』を読むことが、法話にふれるひとときです。実家もお東さんでありまして、縁あって嫁ぎ先も同じお東さんということで昔、親などが皇室の方がお東の大谷さんへ嫁いでいるんだよと言っていたのを思い起こしたのです。今回15部に出てこられたお母様という方がそうだったのでしょうか…？

東京都町田市　諸戸　貞昭さん

『みめぐみの』の第17部七頁に阿弥陀様の本願力について「私たちを根底から支える力であり、…私たちの前方を見せる光明であり、やるべきことをやる勇気です。」と信心のご利益が的確に説かれており、誠にありがたい事です。

富山県東砺波郡　匿名希望

雑修、たら、をすて御はたらきづめ、守りづめ、を喜び、御台下のいつも頑張る勇気、今日自分のすべき事、おしえて下さる、やさしい御気持に感謝しつつ、後者の気持ちで努力致したく御導きお願い致します　かしこ

質疑応答

富山県東砺波郡　河合　寛さん

南無阿弥陀仏、お念仏が習慣となり意識せずにできるのですが喜びの念仏も、病気で苦しみの念仏もあります。私の思いを超えて仏様のお働きであると頂いて

います。第17部の二十二頁に生死の苦しみを超えたところに真の安住がある…と書かれています。これについて詳細に御教示をたまわりたく思います。

答　それこそ、お浄土、極楽です。そここそ生死の苦しみを超えたところであり、真に安住できる世界です。私たちは、自力の念仏から他力の念仏へと進むことによって、そこへ往生できるという安心感から、「現世を祈る存在」でありながら、それを超えた智慧を賜わることができるのです。

ただし、この「智慧」にのみ目や心を奪われてしまっていると、往生、信心、念仏……がどこかへ行ってしまいます。シャボン玉（智慧）は確かに存在しますが、手（凡夫）で摑むことはできません。シャボン玉の材料となる石鹸水（信心と念仏）こそ大切です。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今年、光道台下は春から初夏にかけてご門徒の枠とは別に講演の機会を三回お持ちになるご予定と伺っています。機会を見て『みめぐみの』に掲載の運びとなることと存じますが、視点をかえてお話される内容を通して、見えなかった自分の一面が見えてくるのではないかと思います。

今回もそうした話の流れから、親鸞聖人のご和讃の中でも最もポピュラーな『恩徳讃』の「…べし」の解釈を通してお念仏を癖（習慣）にしていくことの大切さを教えて下さり、「お念仏が他の癖を追い抜いて、『癖筆頭』になることでしょう」と締めくくって下さっています。光道台下が仰る「癖」になるように肩肘の力を抜いて、まずは口に出して称えるところから始めてみたいものです。

また、読者の頁に「実行してよかった」とか「やってみたけど…」といったご感想や、積極的なご質問もお待ちしております。ふるってお寄せ下さい。

みめぐみの　第18部

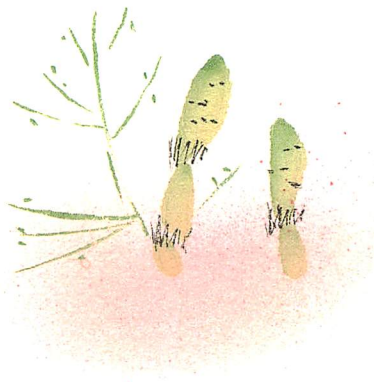
2003年３月５日　印刷
2003年３月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会
〒600-8167 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
本願寺寺務所内
TEL.075(351)3555　FAX.075(351)3120
振替口座　01060-5-56990

印　刷　㈱中外日報社



みめぐみの刊行委員会刊